みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

旅の歌の歴史を読む (特集 歴史研究と情報処理)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005929

特集／歴史研究と情報処理

旅の歌の歴史を読む

久保正敏

はじめに

以前から筆者は世相・風俗に興味があり、その変遷と社会情勢・事件との相関をできるだけ客観的な手法で分析してみたいと考えてきた。大げさに言うならば、文化のパターン分析を試みようと言う訳である。その一環として、歌謡曲とニューミュージックを「旅の歌」という切り口から歌詞分析することにした。

歌謡曲で歌われる旅

まず歌謡曲で歌われる旅を考える。筆者は、「行く旅」「帰る旅」「さすらいの旅」の三つの枠組みで旅を考えることにした。「行く旅」は未来志向のもので、憧れを動機とする。「帰る旅」は過去志向で、しばしば郷愁と結びつく。「さすらいの旅」は、故郷、安住・安定の地、希望の満たされる地、などを求めるが得られない、という状況を表し、過去と未来のはざまにあえぐ現在に対応すると考えられる。このような三つの旅という枠組みに沿って、昭和ヒット・レコードの分析を行った。

地名入り歌謡曲の消長

昭和初期に成立した近代的レコード会社は、「都会賛美調」、「地方賛美調」、「股旅やくざもの」などの「旅の歌」を大量に生み出した。「都会賛美調」と「地方賛美調」の流行の背景には当時の都会－地方の対立関係があり、「股旅やくざもの」流行の背景には、金融恐慌、農村の疲弊、軍部の影と言った社会不安があったことを考え合わせると、昭和歌謡曲は「旅の歌」から始まった、と言っても過言ではない。

これを端的に示しているのが地名入り歌謡曲、一般に「ご当地ソング」と呼ばれる歌謡曲の出現率である。地名が入った歌謡曲の全てが旅に関係するとは必ずしも言えないが、一つの指標として取り上げてみた。『全音歌謡曲大全集』に収録されている、1987年前半までの昭和ヒット歌謡曲2,708曲の中から、歌詞に地名が含まれているか、または地域が推測できるもの546曲を選び、ほぼ5年刻みの各期間において、総歌謡曲に占める割合を計算した。その推移を眺めてみると、昭和初期には総ヒット歌謡曲の40％が地名入り歌謡曲であり、昭和歌謡曲が旅の歌から始まったことを裏付けている。

歌われる地域の変遷も含めて、地名だけでなく風物描写の含まれる歌謡曲を旅の歌と考えて、その変遷をたどってみよう。昭和初期には「都会賛美調」の舞台としての東京・京都・大阪、大正期の新民謡運動を引き継いだ観光歌謡としての「地方賛美調」舞台としての湘南・伊豆箱根など首都圏周辺観光地、など、地域は限定されていた。しかし、1931年の満州事変、翌年の第一次上海事変を契機とする戦線拡大に伴い、満州を舞台とする「曠野もの」といった陸軍の北進論に対応するものや、海軍の南進論に対応するジャワ・タイ・上海などの「現地もの」が

増え、一方、社会不安を反映した「マドロスもの」や「股旅やくざもの」の舞台としての利根・潮来・博多・上州・信州が増えてくる。

敗戦直後の時期、歌われる土地は東京に集中する。敗戦東京の現実を直視し哀感こめて歌う「現実悲観調」と、戦争が終わったという解放感や戦前東京を懐古する「現実楽観調」に大別できる。1955年から1964年の時期には、経済復興や高度経済成長を反映し、復興したモダン東京を賛美する「モダン東京賛美調」や、地方から都会への大規模な人口移動を背景に「都会－地方交流」の歌が現れた。特に、都会への憧れと郷愁が交錯して歌われる後者が頻出した。この時期、地名入り歌謡曲の出現率も戦後期のピークを示し、これは人口移動と強い相関を示す。国勢調査の人口移動統計から、南関東・中京・西近畿などの大都市圏への人口流入を算出してみると、この時期の推移曲線が地名入り歌謡曲出現率の推移曲線と見事にマッチするのである。

1965年以降、都会への人口流入がピークを過ぎると、今度は地方の歌が増え始める。当時も都会への集中の反動として地方分散や地方復権が叫ばれたが、歌の世界でも「ご当地ソング」という言葉が生まれるなど、歌われる地域の分散現象が見られる。しかし、この時期には全国的な都会化が進行し、都会－地方の対立関係はもはや消滅したために、昭和初期に見られたような地方の風物を風情豊かに賛美する歌が少なくなって、恋物語の背景としてのみ土地の風物が歌われるタイプの歌が多くなってくる。ネオン街の女性の悲恋を歌う「ネオン艶歌」、別れた恋人に対する「別れと未練の歌」、昔の恋人をしのぶ「慕情」の歌が、地方を舞台に登場する。1970年の大阪万博以降、「ディスカバー・ジャパン」など若い女性をターゲットとする旅行ブームが仕掛けられ、「ふるさと再発見もの」や「京都もの」が流行する。

1975年頃以降の旅の歌謡曲は、恋人との別れや未練を歌う演歌と、ニューミュージックやアイドル歌謡に大別できる。前者は殆ど北方を舞台とし、後者は海外旅行の日常化を反映してイメージとしての南方や様々な外国を舞台とする、という大きな特徴がある。もう一つ注目すべき点は、映画やテレビ、グラビア雑誌など、視覚メディアが与えるイメージが旅の動機付けの主役を担うようになったため、歌謡曲の持つメッセージ性が低下してきたことである。イメージの先行は、旅の意味にも変化を及ぼしている。今や旅とは、様々なメディアによって既に自分の内部に作り上げられたイメージを現地にでかけて確認する行為なのであって、新たな発見や感動は最初から期待されていないのである。メッセージの歌からイメージの歌への変化は、地名を特定せずイメージを喚起する歌の増加、歌詞における風物描写の減少、などの点に現れている。現在は、旅が歌謡曲のモチーフとして成立しにくくなった時代なのかもしれない。

旅の歌謡曲のジャンルの変遷

このことを、一種の歌詞のモデル化によって確認してみよう。旅の歌のジャンル分類にあたって筆者が注目したのは、憧れ、郷愁、慕情、未練などの心情モチーフの他に、風物描写程度、登場人物などの特徴パラメータである。風物描写程度は、視覚的、聴覚的なものを示す名詞が歌詞に出現する数をあて、これを風物描写指数とする。登場人物については、歌詞に一人称のみ登場するものに1、二人称まで登場するものに2、あの子、あの人など過去の恋人を三人称で呼ぶものに3、肉親や友人が登場するものに4、没交渉の第三者のみ登場するものに5、とそれぞれの歌に得点を与え、これをカメラアングル指数と呼ぶことにする。なぜなら、歌詞のストーリーを映画化すると考えた場合、得点が小

さな歌は描写の焦点が自分に近い、いわばクローズ・ショットの画面であり、逆に得点の大きなものは遠くに焦点のあるロング・ショットの画面作りに対応すると考えられるからである。

これら二つのパラメータを用いて、旅の歌のジャンルの特徴空間を描いてみたのが図1である。いくつかの興味ある事実が指摘できるが、特に注目したいのは、図の右上から左下への時間的な変遷である。すなわち、ロング・ショットの歌からクローズ・ショットの歌への変化、風物をメッセージとして含む歌から恋の歌への変化が読み取れることである。これは、歌謡曲が社会的メッセージ性を弱め、私生活中心主義のものへと変化してきたことを物語っているように思われる。このことと、地名入り歌謡曲出現率の低下とを合わせて考えれば、現在は移動としての旅の歌が成立しにくい時代と言えよう。

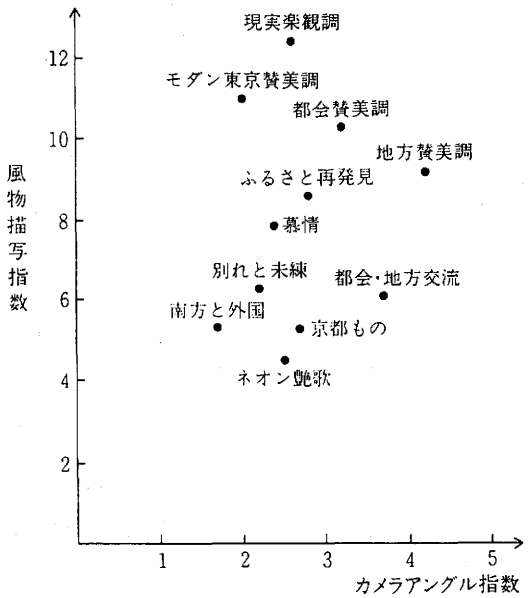

図1　地名・風物入り歌謡曲の特徴空間

ニューミュージックにおける心の旅

以上は、空間的移動としての旅に着目した分析であるが、時間的移動としての旅、心の旅に関する歌も日本人の好むジャンルであろう。青春時代を回顧する歌も、過去の自分への旅を描いていると見なすことができるし、失恋の歌も過去を振り返ることが多いであろう。しかも、先述した私生活中心へのシフトに伴って、これら心の旅の歌が増えていることが予想される。

そこで、主に恋愛をテーマとするニューミュージックを対象に心の旅の分析を試みた。ニューミュージックのヒット曲集（ドレミ楽譜出版社『ニューミュージック　ベスト222』及び全音楽譜出版社『フォーク＆ニューミュージック決定版』）から、1965年から1989年の間に発表された302曲を選び、歌詞をデータ入力するとともに、タイプ分けのために設定したいくつかの分類項の値を各曲に与えてデータベース化した。

データベース化のために設定した分類項は、歌詞の話者、1人称代名詞、2人称代名詞、その他の登場人物、歌詞内の英単語数、モチーフ、恋愛フェーズ、話者の感情、破局のパターン、歌詞の時間的方向性、季節、などである。時間的方向性とは、歌詞の内容が過去に向かうのか未来に向かうのか、といった観点で、筆者が独自に判定したものである。

ニューミュージックの時間的方向性

ニューミュージックの歴史的変遷を捉えるために、1965年－1969年の第1期、1970年－1974年の第2期、1975年－1979年の第3期、1980年－1984年の第4期、1985年－1989年の第5期に区切り、発表年によって曲を各期間に割り振ってマクロな傾向を見てみよう。表1は、ニューミ

時期	総数	英語歌詞入り	恋相手以外の人物登場	TV・映画タイアップ	若者モノ	恋愛モノ	過去指向	未来指向
1965-1969	42	0	16(38.1)	1(2.4)	11(26.2)	18(42.9)	11(26.2)	15(35.7)
1970-1974	82	2(2.4)	6(7.3)	3(3.7)	11(13.4)	54(65.9)	33(40.2)	13(15.9)
1975-1979	77	7(9.1)	11(14.3)	6(7.8)	7(9.1)	60(77.9)	25(32.5)	16(20.8)
1980-1984	64	26(21.7)	2(3.1)	12(18.8)	6(9.4)	56(87.5)	25(39.1)	12(18.8)
1985-1989	37	22(59.5)	0	16(43.2)	4(10.8)	32(86.5)	11(29.7)	15(40.5)

表1　ニューミュージック全体の傾向：（　）内は総数に対する％を示す

ュージック全体の傾向を見たもので、数字は分類に対応する曲数、カッコ内は各期間の総曲数に対する百分率を示す。

まず目につくのは、英語の歌詞を含んだ曲、恋愛をモチーフとする曲、さらに、映画・テレビドラマ主題歌やコマーシャル・ソングと言ったタイアップ・ソングが、年を追う毎に増加していることである。モチーフの点から見れば、第1期のフォーク・ソングにかなり見られた「若者モノ」は、「ニューミュージック」という呼称が登場した第2期以降減少し、「恋愛モノ」が主流を占めて第4、5期には9割近くに達しており、ニューミュージックのほとんどが恋愛をテーマとする状況である。

こうした状況と呼応して、歌詞に友人や肉親など恋愛対象以外の人物が登場する曲の比率も急減している。「若者モノ」に見られるような人間的な広がりがなく、「恋愛モノ」では、恋愛フェーズがハッピィな状況では、僕と君、わたしとあなた、など二人だけの世界が歌われ、二人の時空間距離が開いた状況では、あいつ・あの娘・あの人などの表現で相手を参照し、他の人物は眼中にない。私生活中心へのシフトがここでも裏付けられる。

「恋愛モノ」が大勢を占める状況は歌詞の時間的方向性にも反映され、第1期には「若者モノ」が支える「未来指向」が「過去指向」を上回っていたが、その後「恋愛モノ」の歌う「過去指向」が「未来指向」を圧倒する。しかし、面白いことに第5期には再び「未来指向」が「過去指向」を上回るが、これは恋愛モノのうちで「未来指向」が増加したためと思われる。

この時間的方向性について、少し詳しく見てみよう。図2の上段に示すのは、5年間の期間について「過去指向」と「未来指向」の曲数を集計し、その期間の総曲数で除したものを中央の年の値として割り当てるという、単純な移動平均法によって、1969年から1989年の時間的方向性の変化を見たものである。図2下段は、「未来指向」÷（「未来指向」＋「過去指向」）の式によって求めた「未来指向の優勢度」の移動平均である。この折れ線グラフを見ると、未来指向が優勢な時期は1970年頃まで、および1985年以降の時期であることが示されている。

こうした変化の背景を探るために、経済の動向を調べてみよう。図3には、水平の時間軸を図2と対応付けて描いた景気動向の一致指数を示す。この指数が50％を越えている時には景気上昇曲面にあり、図3のハッチングを施した部分が不景気の期間とされる。図3と図2の未来

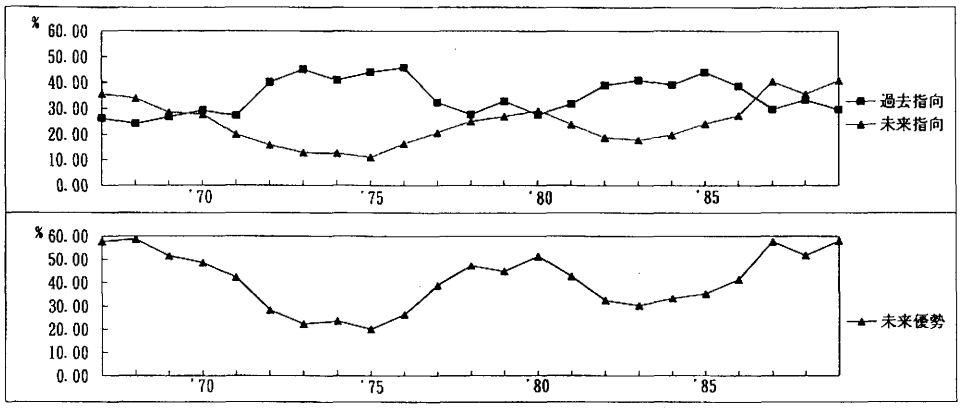

図2　ニューミュージックの時間的方向性

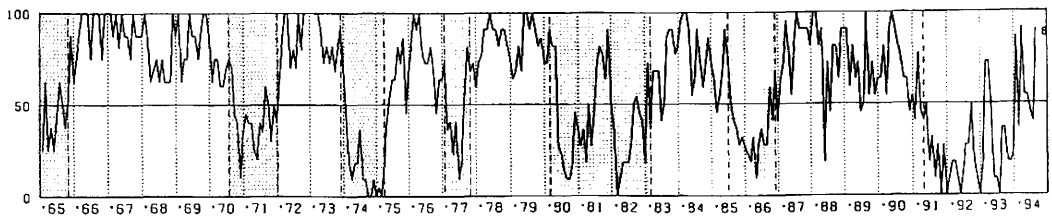

図3　景気動向の一致指数

出典：経済企画庁編『グラフが語る日米の景気動向』平成6年11月号

優勢の変化とを突き合わせてみると、不景気の時期と未来指向の優勢度が低下する時期とがほぼ重なるように見える。このことだけで、不景気の時期には未来指向が弱まる、と断言することはできないが、今後の分析次第では、歌詞の時間的方向性と経済動向との相関について知見が得られる可能性はあるだろう。

その他にも、社会情勢や風俗、ミュージシャンや周辺スタッフの世代交代、などとどのように関連しているのかも興味深い考察課題である。例えば、1981年5月開始『俺たちひょうきん族』、1982年10月開始『笑っていいとも』、1985年4月開始『タケシの元気が出るテレビ』など一連の元気印のテレビ番組、1988年7－9月放映『抱きしめたい』に始まるトレンディードラマが描く恋愛風景、1989年2月開始『いかすバンド天国』がきっかけと言われる若いミュージシャンの台頭、などは、ニューミュージックの描く世界に大きな影響を与えていることが予想される。

おわりに

今後も、他民族文化との比較も含めて、世相史と歌との相関関係を見ていきたい。こうした分析作業は、基本的にコンピュータ処理によって進めるが、ここで注意したいのは、歌詞という一次情報を単にデータベース化しただけでは不十分なことである。それを如何にモデル化して二次情報を引き出すか、そして、それらをどのように数値化していくかが、人文学研究におけるコンピュータ利用の鍵である。この点にも配慮しながら、人文学へのコンピュータ応用を考えて行きたい。

参考文献

1)久保正敏「歌謡曲の歌詞に見る旅－昭和の歌謡史私論－」『国立民族学博物館研究報告』15-4、pp. 943-986、1991。

2)久保正敏「ニューミュージックに見る恋愛風景」『情報処理学会　人文科学とコンピュータ研究会報告』25-6、pp. 49-57、1995。

（くぼ・まさとし，国立民族学博物館）